

# 主体的な学びとは

# NIE用いた教育手法開発を

2017/8/29

文部科学省による次期学習指導要領が平成32年度から順次実施される。新たな指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。抽象的な表現だが、これまでのように知識量が問われる暗記型の勉強から、対話や議論などによって主体的に学ぶ、思考型にシフトチェンジしなくてはならないということのようだ。

## 大学入試が変わる

私たちの周辺では近年、パソコンやスマートフォンなどの電子機器がすでに身近な存在となった。知りたい情報は瞬時に、また簡単に手に入る。これからもAI（人工知能）の発展などによって、さらに「便利」な世の中になっていくだろう。だからこそ、単に知識量が多いことよりも、自分で課題を見つけ、蓄えた知識を使いこなすことが重要だということなのだ。

ただ、この方針転換に、教育現場では戸惑いも見受けられる。例



社会部次長 河居貴司

ム上の大きな動きも控えている。大学入試センター試験の終了を受けて32年度から実施される新テストの登場だ。こちらも暗記型から思考力などを問う内容に変更される。例えば、統計資料や新聞記事を読み解いて仮説を立てるといった問題なども想定されるといって、大学入試が変わることで、高校以下の授業や試験にも大きな影響が出て、教育界はまさしく変動期にあるのだ。

そうしたなか、8月3、4日の2日間の日程で、名古屋市内で開かれたNIE全国大会では、興味深い話を聞くことができた。NIE（エヌ・アイ・イー）とは、Newspaper in Educationの略で、学校などで新聞を教材として活用する取り組みのことだ。大会には教育関係者をはじめとする約2300人が参加し、新聞を使った授業の実践報告などが行われていた。

## 記事を多角的に検証

教育手法としてのNIEは、関

係者の長年の努力もあって一部には浸透しているものの、残念ながら「どこの学校でも行われている」というほど、ポピュラーな取り組みでもない。

ただ記事の切り抜き集をついたり、記事の要約をしたり、さらにニュースをもとに討論を行ったりといった新聞を使った授業はこれまで各地で行われていた。このため大会では、これまでの成果について、教育界のシフトチェンジを先取りしたようなものだとする発言が相次いだ。NIEの取り組みはすでに日本では30年以上、ある教育関係者は「新たな学習指導要領や新テストに対応するために、全く新たな教育法を開発するより、蓄積のあるNIEを利用する方がずっと早い」とまで言明していた。

実践報告では、ある小学校の先生が「今の子供たちは縦書きの文章に慣れていない」と話していたことが印象的だった。インターネットの記事やテレビの映像などに登場する文字の多くは横書きだから

らだ。これは活字文化の行く末にも直結する。この先生は「子供たちに縦書きに慣れてもらう」という意味でも新聞の役割は大きい」と指摘していた。

一方、新聞を使った高校生たちによる研究発表では、記事の内容について、家族で話し合ったことを織り交ぜながら語る生徒が多かった。発表を聞いていた教育委員会の担当者は、生徒たちに「単に記事を読むだけでなく、そのことで誰かの意見を聞くなど、一歩進めることが大事」と指摘したうえで、「新聞に書いてある意見が全て正しいわけではない。いろいろな角度から検証することも大切だ」とも話していた。さまざまな課題をめぐって、新聞各紙の論調が分かれることも多いだけに、NIEは、多様な意見に触れることの有用性を学ぶきっかけにもなるだろう。

## 考えるきっかけ

産経新聞大阪本社では、NIEの取り組みの一環として、今年4

月から「NIE@産経 新聞で学ぼう」と題した新たなページをスタートさせている。原則第1土曜日の掲載で、毎回ひとつのテーマをとりあげ、図表などを交えた記事解説を行っているのだ。

毎週日曜日に掲載している「おやこ新聞」が、主に小学生をイメージして編集していることもあって、「新聞で学ぼう」の主なターゲットは中高生。毎回「考えるポイント」のコーナーをつくっていることが特徴で、教室や家庭で話し合ってもらったり、自分で調べたりしやすいよう「考えるきっかけづくり」を提供したいと考えている。

次期学習指導要領や新テスト導入に向け、教育現場は今後も、どういった教育手法が効果的なのか、模索が続くことになるのだろう。情報がすでに氾濫する社会の中で、物の分別を含む思考力をどう育むのか。教育手法の開発に今後、新聞が活用されていくことを期待したい。